

令和7年度

鹿児島県教育

10月号

巻頭言



真心で向き合い、許し、待つ

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会副会長

鹿児島市立武中学校
坂中裕一

昭和四十四年、鹿児島市と山形県鶴岡市は兄弟都市盟約を結んでいる。この盟約は戊辰の役を契機としたものであるが、私の勤務校である武中学校は、昭和五十年に鶴岡第二中学校と兄弟校盟約を結び、今年で五十周年となった。本校が創立七十八周年であるから、兄弟校盟約の歴史は、本校の歩みとさほど違わない。

両校はこれまで、二年に一度の相互交流を実施しており、今年は七月三十日から八月一日の三日間、鶴岡第二中学校の教職員、生徒代表、PTA、後援会からなる総勢二十四人の使節団が本校を訪問され、記念式典を実施するとともに、鹿児島市内の史跡を巡った。これまで鶴岡市を訪問した本校関係者は、揃って西郷南洲翁に対する鶴岡の方々の敬愛の精神は、想像を超えるものであると語られる。実際、使節団の方々は、西郷南洲翁の知識に豊かであった。今回は、東川隆太郎氏の案内で、西郷南洲翁縁の地を訪ねて回ったが、我が郷土に関する私自身の知識が余りにも乏しいことに、気付かされることとなった。

なぜ、鶴岡の方々がこれほどまでに鹿児島を慕われるのか。このことは、今回私の最大の関心事であった。鶴岡第二中学校の佐藤大吾校長は、「鹿児島市と鶴岡市の関係は、かつての敵対関係を乗り越えて築かれたもので

あり、そのような経緯を原点として交流を重ねているという点において、国内はおろか世界的に見ても極めて稀で、貴重な関係だと感じている。また、郷中教育によって培われた南洲翁をはじめとする薩摩の武士による温情と寛大さ、そして庄内藩主・酒井忠篤公と家老・臥牛翁、菅実秀の『敵から受けた恩を忘れず、敬意と学びをもつて応える』姿勢が、両市を深い縁で結び付ける礎となっている。」と、話された。

四月の赴任以降、友人関係に悩みを抱えた多くの生徒たちが校長室を訪れる。時には一時間を超えて思いの丈を語る生徒もいる。生徒の感情や考えを理解し、寄り添う気持ちをもち、接し、言葉を選びながら前に進ませようと努めてはいるものの、これらの生徒たちは我が事に精一杯で、相手の気持ちにまで思いを馳せることがあるだろうか。

今回の交流を通して生徒たちが何を学んだのか推し量ることしかできないが、日々の友人関係を良好な関係へと導く糸口は、百五十年以上も前の偉人たちが範を示しているように思えてならない。戊辰の役後、西郷南洲翁が、どのような心情で庄内藩と対峙したのか想像してみたい。それは「真心で向き合い、許し、待つ」心であったのかもしれない。

令和7(2025)年 10月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	16
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		
表紙絵(桜島の絵)		10月号～2・3月号 志布志中学校 徳重 正宏	



随想



世界へ羽ばたけ“芋焼酎”

大口酒造株式会社 会長 神 渡 巧

鹿児島県は言わずと知れた焼酎王国である。一口に焼酎と云っても使用する原料により芋焼酎あり、黒糖焼酎あり、麦焼酎あり、米焼酎あり、ソバ焼酎ありと、その種類は多彩でありそれぞれの酒質は原料ごとに個性的な風味がある。

なかでも芋焼酎は、原料であるサツマイモを彷彿させる香味を持つ極めて特徴的な酒質である。平成の中ごろまでは、日本国内においても、芋焼酎の認識は薄く、芋焼酎と云えば「芋くさい」の一言で片付けられてきた。「芋くさい」とはサツマイモを原料とすることから、嗜好品としては高い原料特性を有しているが、芋焼酎

になじみのない人には高いハードルとなっていた。しかし、この「芋くさい」を詳細に検討してみると、サツマイモに由来する芳香性豊かな成分により構成されていることが分かり、これから芳香成分は、ワインやビールに含まれるものと同じ香り成分であった。また、ワインではその酒質から原料であるブドウの品種を、ビールでは使用したホップの種類を特定することができる品種香が確認されており、芋焼酎でも同様

にその香りや酒質により、サツマイモの品種を特定することができる品種香が見受けられる。さらに、近年の芋焼酎では、スズランやキンモクセイ、レモンやパッションフルーツ、マスカットワインや赤ワイン、あるいは紅茶などの香りを感じる製品が登場し、その味覚への評価は急速に高まっており、高度な製造技術に裏打ちされた酒質は、国際的にも引けを取らないものとなっている。

ここで芋焼酎の原料であるサツマイモに目を向けてみよう。サツマイモは中南米を起源とするヒルガオ科の作物であり、今日では世界中で広く栽培されている。サツマイモの日本への伝播として、一四九二年コロンブスによりアメリカ大陸からスペインへ持ち込まれ、ヨーロッパを経てアフリカ、インド、インドネシアへ波及し、中国を経由して琉球（沖縄県）へ到達したものと考えられる。薩摩藩（鹿児島県）で栽培された記録としては、一六九八年に種子島久基が、琉球から取り寄せ種子島に伝えたのが最初である。一七〇五年に前田利右エ門が、琉球から指宿市の山川へ持ち帰ったことが、薩摩藩全

略 歴

一九八七年 大口酒造協業組合 入社
二〇二四年 社長就任
二〇二五年 会長就任

域で栽培される契機となった。実に二百年に及ぶ旅を続け、サツマイモは鹿児島県に定着したのである。

ほどなくして、サツマイモが焼酎の原料として使われるようになったものと考えられ、この時に芋焼酎は誕生した。以後約三百年間にわたり、鹿児島県を中心とした南九州の地で、庶民の酒として愛飲されてきたが、それが平成の中ごろに突如として芋焼酎ブームが起こり、日本中に知られることとなった。もちろん、そこには各蔵が製造技術を研鑽し、酒質向上に取り組んだ努力がある。現状の芋焼酎は、日本の伝統的な酒類として世界の人々から親しまれる、歴史的・文化的・酒質的な要素を有していると、みることができる。

これからの芋焼酎は、サツマイモの伝播を逆流するように、鹿児島から世界中に進出していく使命がある。

※この寄稿文は、日本醸造協会誌（二〇二四）第百十九巻 第七号「巻頭随想」に投稿したものを一部改変した。



本気で取り組む学校の働き方改革

知覧小(南) 比志島 寿

一 はじめに

「学校の働き方改革」という言葉が使われるようになってどのくらい経つだろうか。文科省は、二〇一九年に「学校・教師が担う業務に係る三分類」を緊急提言として示したが、役割分担は進展していない。登下校時の安全管理や学校徴収金に係る業務は、学校の役割であると思われるし、管理下外で起きた子供のトラブルまでも学校に苦情がくるのが現状である。また、勤務時間外の保護者対応を誰も疑問視していない。

教員不足や教職の魅力低下が叫ばれる今こそ、校長がリーダーシップを発揮し、働きやすい職場づくりに努めなければならぬ。

二 本校で取り組む業務改善

(一) 長時間勤務の削減

本校に着任した当時、長時間勤務が当たり前になっていた職員意識改革からは、退校目標時刻や定時退校日を再認識させる。また、出勤時刻の記録を基に超過勤務の実態を明確にし、改善を促すとともに、計画的な年休取得(年間十五日以上)も推進す

る。

(二) 深刻な保護者対応(校長が矢面に立つ)

年度当初の職員会議で、毎年必ず発する言葉がある。「よくない情報ほど早く挙げよ。事が大きいのか、小さいかは校長が判断する」。校長が先頭に立って対応し、絶対に担任任せにはしないことを明言する。

「保護者対応は一晩置くな。その日のうちに対応せよ。」が、本校の基本姿勢である。深刻化しそうな事案は、校長自ら積極的に動き、矢面に立って丁寧に対応する。

定期的に行う「いじめアンケート調査」は、全児童の調査結果をクラウド上で見える化し、迅速な対応と報告を行わせる。調査はしたが対応が遅れれば、何の改善にも繋がらないし、早期に対応することで、保護者からの苦情を収めるねらいもある。

(三) 日課表の見直し

従来の慣行や学校文化を見直し、清掃活動は朝の活動に位置付け、週二回とした。学期末は、成績処理等の時間を勤務時間内で生み出すために、清掃活動以外の朝活動のカットし、金曜日は全学年で五時間と

した。また、放課後の会議等は、原則計画しないこととし、学級事務等に専念できるようにした。

(四) スクール・サポート・スタッフの活用

本校には、補助的業務へのサポートスタッフが配置されている。授業準備や印刷物の対応、学校徴収金の金融機関への預入や引出など、これまで担任が担っていた業務の一部が負担軽減された。ただし、学習評価や成績処理は、教師の指導の振り返りと捉え、サポートスタッフの補助的業務には位置付けないことを共通理解した。

(五) 保護者への意識付け

子供の教育を担うのは、教員だけではなく。保護者の意識を揃え、学校教育と家庭教育が充実することで、教育効果が期待できる。PTA総会では、「世界平和と命の尊さを語り継ぐまち・南九州市の基本理念に立ち、知覧小ではいじめは絶対に許さない、絶対に見逃さない。」「子供たちの命や安全を守ることはもちろん、職員の命や健康を守ることも校長の仕事である。」と、断言する。

保護者にも危機意識をもたせることが、結果として業務改善につながると考える。

三 おわりに

本校の取組は、当たり前の小さな改革である。校長が覚悟を決め、先頭に立って進めることが、職員の笑顔を増やし、誰もが勤めなくなる学校になると信じていた。多岐にわたる業務を少しでも削減し、質の高い教育を提供できるよう、今後も全職員で取り組んでいく。



創立記念日の大切さについて

大城小(大) 根 釜 恵理子

一 はじめに

本校は、鹿児島県の南南西五百四十六kmの洋上に浮かぶ沖永良部島のほぼ中央部に位置している。校区は五つの字からなる農村地帯で、保護者・地域共に大変協力的である。

本校の学校教育目標は「共に学び共に伸びる」、校訓は「負けじ魂」、キャッチフレーズは「祖先の知恵を受け継ぐ大城小」である。この三つを念頭に、学校経営を進めている。

本校では、毎年十二月一日の創立記念日を祝して行事が開催されている。昨年度赴任して、創立記念式典がもたらす効果を強く感じた。そこで、創立記念日の大切さについて述べさせていだきたい。

二 毎年、創立記念日を祝う理由について

創立百周年などの記念の年に式典が開催されることは聞いたことがあるが、毎年、創立記念式典を開催している学校については聞いたことがなかった。そのため、本校で、なぜ毎年、創立記念式典を開催しているのか、その理由を紐解いてみた。

本校の創立百周年記念誌に掲載されている第二六代校長「島田信彦氏」の寄稿文に、理由が掲載されていた。島田氏の寄稿文を参考に紹介させていだき。

「明治三十一年(一八九八年)一月に新しい

学校の建設が始まった。全て人力で工事が進められ、校区民が総力を結集して、汗水を流し、校舎は八月に竣工した。そして、九月一日の開校を心から楽しみにしていた。ところが、八月二十七日、古今未曾有の大暴風が襲来し、一夜で校舎は全壊してしまった。喜びの絶頂から悲嘆のどん底へ突き落とされた校区の人々は、一時は呆然自失の状態だった。しかし、そのままくじけることはなく、九月に入るとやいなや復旧工事に着工し、前にも増して一丸となって工事を遂行した。そして、十二月一日に『大城尋常小学校』として発足した。大城小学校が毎年、創立記念日を祝賀するのは、先人の苦勞と感激を偲び、語り継ぐためである。」

この寄稿文から、毎年、創立記念日を祝する理由を知り、大変感銘を受けた。

三 創立記念日の取組

(一) 創立記念式典

式典には、来賓・保護者・地域の方を招待している。式次第は、学校長式辞、児童代表の言葉、お祝いの言葉などである。式辞では、創立記念式典を毎年開催する理由や校訓「負けじ魂」の由来、学校が現在の

場所に建築された理由、先達の取組などを子供たちに分かりやすく伝えていく。児童代表の言葉では、大城小を誇りに思う気持ちや、地域・保護者への感謝の気持ちなどを発表している。式典の最後には、全児童が島ムニ(方言)で、自己紹介や頑張っていることなどを発表し、盛り上げている。

(二) 創立記念学習発表会

式典終了後、来賓・保護者・地域の方がいらっしやる中で、学習発表会を実施している。式典と同日に実施することにより、児童の学習の成果を多くの方に見ていただくことができ、大変有意義な場となっている。

(三) 創立記念祝賀会

創立記念日の夜に、来賓・保護者・地域の方・教職員が集い、開催している。これまでの創立記念式典の話や学校の様子を伝えるなど、情報交換や連携を深める貴重な機会となっている。

四 おわりに

これまで赴任した学校では、創立記念日を意識したことはあまりなかった。しかし、本校に赴任して、創立記念式典を体験して、毎年毎年、学校の創立を祝することにより、児童の愛校心や郷土愛が育まれていることを痛感した。また、保護者や地域の方にもそのような姿が見られ、自分自身の学校を大事に思う気持ちが、自分自身や周囲を大切にすることが大切になっていることを感じる。

本校児童が粘り強く様々なことに取り組むことができるのは、毎年創立記念式典を開催していることと大きく関わっているのではないかと思います。



地域と共に児童を育てる教育活動

羽島小(日) 岩 戸 孝 夫

一 はじめに

本校はいちき串木野市の北西部に位置し、北は薩摩川内市、西及び南は東シナ海に面している。気候は温暖で、海岸には亜熱帯植物が自生している。歴史的には、一八六五年五代友厚・森有礼・寺島宗則などの若き薩摩藩士十九名が日本の夜明けを求めて、ヨーロッパに向けて出航した記念の地として有名で、歌人萬造寺齊や教育家萬福直清を生んだ地としても知られている。

地域の教育熱は高く、学校行事にとっても協力的である。薩摩英国留学生の偉業を称えて開催される「黎明祭」や、県の無形文化財に指定されている「羽島崎神社春の大祭(通称:太郎太郎祭)」等の地域行事を中心に、学校と連携しながら運営している。

二 学校経営の方針

本校の学校教育目標は「主体的に行動し、確かな学力を身に付け、豊かな心をもち、たくましく生きる 子供を育てる」である。「全ての教育活動は、人権尊重の精神(理念)の基に行われる」を基盤に、子供に身に付けさ

せたい資質・能力を明らかにして、教児一体で取り組み、活気あふれる学校づくりを目指している。

三 本校の取組

(一) 海で遊ぶ・地域海岸清掃活動(海上保安庁との連携)

本校区は海が近いことから、環境教育の一環として、毎年五月に、全学年で海岸清掃活動に取り組んでいる。当日は海上保安庁にも協力を依頼し、海遊びの注意事項や危険な内容についての講話を受けた後、海岸清掃・環境学習を行っている。長年の環境保全の取組が評価され、今年七月に「海の日海事関係功労者国土交通大臣表彰」を受賞した。

(二) 黎明祭での舞台発表(地域行事との連携)

羽島地区には地域自治団体として「れいめい羽島協議会」が組織されており、多くの活動を行っている。その中の「薩摩藩英国留学生記念館部」では、毎年「黎明祭」という神事を行っているが、今年は留学生がイギリスに渡って百六十周年を記念した

大がかりなイベントを行った。

本校の児童五・六年生も留学生に扮し、その偉業を発表することとなり、練習を重ね、当日は堂々とやり遂げることができた。地域の歴史を学ぶと共に、地域の一員として参加するよい機会となった。

(三) 中学校と連携した学校行事の実施(小中連携)

中学校が隣接していることから、多くの行事等を合同で行い、小中連携を図っている。

中学校教諭による専門教科の授業(音楽)の実施や、中学校での芸術鑑賞事業の合同参加、合同運動会の実施と多くの行事を合同で行うことにより、中一ギャップの解消に役立っている。

(四) 地域産業の体験活動(学校応援団との連携)

本校では学校応援団の協力のもと、地域の農業体験活動を行っている。一・二年生はサツマイモの植え付けと収穫、三・四年生は玉ねぎの栽培、五・六年生は田植えと稲刈りと、異なる農業体験を行うことで、地域理解に努めている。

四 おわりに

子供たちが「心豊かで、たくましく」成長するために、多くの体験をさせることは大切であると考え。今後も地域と連携して、小規模校のよさを生かした教育に取り組んでいきたい。



手々小中学校で学べてよかったと思える

学校経営を目指して

手々小中(大) 児玉明子

一 はじめに

本校は、徳之島の北部、天城岳の麓に位置し、眼下には青い海の広がる場所にある。また、世界自然遺産に登録されたアマミノクロウサギなど、珍しい動植物が生息する自然豊かなところである。小中併設校で、児童生徒数は九名(小学生七名、中学生二名)である。児童生徒の減少の中、平成八年から山村留学制度を始め、今までに約八十名の受入れをしている。今年度も半数は島外からのふるさと留学生である。近年、地域は人口減少、高齢化が進んでいる。地域の方は、学校や地域に子どもたちの声が響き、元気な姿があることを大変喜んでいいる。学校運営など、子どもたちの学びに、地域の方の協力をたくさんいただいている。

二 学校経営の方針

学校教育目標は、「人権尊重を基盤とした、心豊かで、自ら学び、元気でたくましい手々っ子の育成」である。キャッチフレーズに、「Heart warming school(心温まる学校)」を、掲げている。子ども一人一人の強みを生かし、課題解決に向けて寄り添った指導を、全職員で取り組んでいる。また、小規模校の強み、徳之島の自然や文化を生かした教育活動に力を入れている。手々小中学校で学ぶ子どもたちが、一年間、ここで学べてよかったと思えるよう教育活動を進めている。

三 取組の実際

(一) 遠隔授業

本校では、徳之島町内の同じ規模の学校と協力をして、ICTを活用した遠隔授業に取り組んでいる。小規模校の授業で課題となるのは、子どもたちが多様な考えに触れる機会が少ないということだ。また、学習が複式指導になるため、担任が二つの学年の教材研究をする必要がある。遠隔授業に取り組むことで、他校の子どもたちとの交流を通し、子どもたちは多様な考えに触れ、自分の考えを深めることができている。担任も学年を分担することで、一つの学年の教材研究をすることになるので、負担の軽減になり、より充実した指導ができている。また、遠隔授業は子どもたちのICT機器やツール等を活用する力を高めている。

(二) われんきやガイド

遠隔授業については、実施している学校が集まって、年三回研修会を実施している。みんなが遠隔授業をできることを目標に、研修を進めている。各学年部で授業案づくりをして、研究授業を通じた研修をする。ことで、授業のスキルアップを目指している。われんきやガイド

本校では、平成二十八年度から総合的な学習の時間で「われんきやガイド」に取り組んでいる。「われんきや」とは、島口で

(三) 徳之島学

「子ども」という意味がある。取組の内容は、校区内にある史跡や自然、お気に入りの場所などを自分なりに調べ、それをまとめ、実際に校区を歩きながら他者へガイドする。徳之島は、毎年一、二月にかけて実業団の方が合宿に訪れる。その方へガイドをすることを目指している。地域の歴史や自然に詳しい方を講師にお招きして、様々なことを教えてもらっている。自分たちがインプットしたことをアウトプットすることで、更に地域のよさを感じることができ活動となっている。

四

おわりに

新任校長として手々小中学校に赴任して、五か月が経とうとしている。学校経営を進める上で、児童数減少の中で今後の学校の在り方も考えていかなければならない。ここ手々小中学校で学んでいる子どもたちが、地域のよさを実感し、ここで学べてよかったと思えるような学校経営を、九名の職員や地域の方と知恵を出し合い、協力し合って進めていきたい。



一人一人が輝く轟小の特色ある教育活動

轟小(始伊) 植田 秀 樹

一 はじめに

本校は、湧水町南西部の自然豊かな河岸地帯に位置している。近くには川内川が流れ、轟の瀬はカヌー競技の名所として知られ、二〇二〇年「かごしま国体」ではカヌー競技の会場にも選ばれた。明治十一年に創設され、今年で百四十七年目を迎える歴史と伝統ある学校である。児童数四十八人、教職員数十四人の小規模校である。

学校教育目標は「心豊かでたくましく『自ら考え行動する』轟っ子の育成」である。家庭と連携し、地域と連携・協働しながら、特色ある教育活動の充実に向けて取り組んでいる。

二 取組の実際

(一) 縦割り班活動

全校児童を六つの班に編成し、活動している。主な活動は、朝の体力づくり(駆け足、一輪車、長縄跳び)、清掃活動、児童集会での各班による自主的活動等である。六年生がリーダーとなり、下級生を支えながら取り組んでいる。六年生にとっては、下級生に頼られていると感じることが自己肯定感の向上につながり、下級生にとっては、

六年生へのあこがれがキャリア教育につながっている。

(二) 学校の特性や自然を生かした体験活動

学校園でのさつま芋の苗植えから収穫活動までの栽培活動、地域の方が所有する畑での金山ねぎ植え・収穫体験、景観学習(川内川の水質調査等)、カヌー体験学習(プール、川内川で)等に取り組んでいる。これらは、地域の専門家の方々をゲストティーチャーとして招聘したり、河川事務所やカヌー協会の方々に協力していただいたりすることで、地域の自然について理解を深め、郷土への愛着を高めている。

(三) 消防クラブ活動

五・六年生が「とどろき少年消防クラブ」の一員として、地区消防団と連携して活動している。「防災の日」訓練では、消火栓からのホース接続、放水訓練、消火器の使用を学んでいる。年末に夜警巡視として、消防自動車に乗ったり歩いたりしながら校区に「火の用心」を呼び掛けている。年始めの町消防出初式には、まといを持ち、法被を着て参加している。

(四) 地区運営委員会との活動

ア 地区球技大会

夏休みのお盆期間、各自治会チーム対抗のグラウンドゴルフ大会に参加して、地域の方々と活動している。毎年度、二百人余り(子どもを含む)の参加があり、特に高齢者の方々は、子どもとの交流を楽しみにされている。

イ 町豊祭相撲大会

十月中旬に大会があり、参加者を募集して、活動している。練習では、校庭に簡易の土俵を作り、地域の方々の立会いのもと、相撲経験者に稽古をつけてもらっている。大会では、他校の子どもと大熱戦を演じている。

ウ 六年生卒業記念そば打ち体験学習

三月初旬、地域のそば打ち名人の方の指導のもと、保護者も一緒にそば打ちを体験している。地元産のそば粉を練って作り、最後に試食会を行っている。卒業前恒例の親子での思い出づくりとなっている。

三 おわりに

本校の特色は、小規模校の特性や豊かな自然を生かした活動、地域と一体化した活動である。

今後も、未来を創る轟っ子が生き生きと成長するように、教職員みんなで頑張りたい。また、「地域とともにある学校」として、学校と地域の効果的な連携・協働の在り方を常に模索していきたい。



都市部小規模校の利点を生かした

「唯一無二の学校づくり」

鹿児島東高 岩川 透

一 はじめに

本校は、桜島を望む高台に位置し、今年で七十七年目を迎える。もとは吉野・伊敷・紫原の各青年学校が統合されたもので、農芸高校、園芸高校、農業高校と校名が変わり、昭和四十四年に現在の鹿児島東高校となった。これまでに、農業科、家庭科、農産化学科、園芸科、普通科、国際教養科などと学科が再編され、一時期、学年十学級ほどの大規模校であったが、現在は学年二学級の普通科のみの高校である。平成二十四年度からは、敷地内に鹿児島高等特別支援学校を併設している。

二 特色ある教育活動

(一) ことばでつながる

二年生より中国語・韓国語と英語から一科目選択して学べる教育課程となっているのが大きな特色の一つである。生徒たちは検定合格やスピーチコンテストなどに積極的に取り組んでいる。また、現在、韓国の金海伽耶（キメカヤ）高校、中国天津市の

(二) 心でつながる

体育祭と文化祭は、隣接する鹿児島高等特別支援学校創立時から合同実施が続いている。「高特支の生徒とも協力できた」「仲良くできてよかった」と、共に学び合い、高め合い、助け合いながら交流を深めている。これらの共同学習や交流学習を通して、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができ、相手を思いやる人間関係づくりにつながっている。

三 おわりに

(二) 地域でつながる
吉野地区のNPO法人「地域サポートよしのねぎぼうず」と連携した活動であり、明治日本の産業革命遺産に登録された世界遺産観光ガイドボランティアを行っている。また、坂元地区の「せばる隼人舞祭」は平成四年に復元され、坂元台校区の保存会を中心に地域の伝統行事として定着してきた。この郷土の伝統継承のため、ダンス部を中心に「せばる隼人舞同好会」の会員として復活直後から活動を続けており、保存会の指導を仰ぎながら練習を重ねている。このように、地域との関わりの中で、社会性、豊かな人間性を育むことにつながっている。

ことば・心・地域の三つに分けて「つながり(交流)」を中心とした取組を紹介してきた。生徒たちには、スクールモットーとして「チャンス！(今この瞬間を) チャレンジ！(ここで挑戦しよう) チェンジ！(変わることは成長だ)」と呼び掛け、「チャレンジ！高みへのステップ(一歩前へ、一つ高みへ)」をキヤッチフレーズとし、毎日の教育活動に取り組んでいる。中学時代に数々の困難を経験した生徒や、今も様々な課題や悩みを持つ生徒が多い中で、生徒たちがこの学校に来てよかったと心から思える学校を目指して、職員一人一人が使命感を持って邁進する日々である。

心に残るひとこと



心を動かされた先輩からのひとこと

副田小(北)川 添 正 和

私が管理職となり十三年間、これまでお仕えた校長、教育長の御指導を仰ぎながら、学校の管理運営に携わってきた。

振り返ると、二十代、三十代の頃は、管理職の道を志すことなど、あまり考えていなかった。二十代のある日、天文館で手相を見てもらったとき、「あなたは人の上に立つ相が出ている。」と言われたが、「自分は管理職になる気はないのに。」と、軽く聞き流していた。

三十五歳を迎える年となり、教頭先生から管理職試験の受験を勧められた。受ける気はあまりなく、返事のためらっていた。ある日、教務主任をされていた先輩の先生から「管理職試験、受けないの。」と、聞かれたので、「管理職にな

る気はないので受けません。」と言ったところ、「管理職になる、ならないは、試験に受かった人が言うことだ。」と、叱られた。性格的にむきになるタイプの私は、「だったら受験して、なる、ならないを言える資格を取ろう。」と思い、受験することにしたのであった。

それから月日が経ち、その時のことを思い出した際に、先輩はあの時、自分がむきになることを見越して、あの言葉を言われたのではないかと考える。先輩は私が学級経営で悩んでいるときに、親身になって話を聞いてくださり、励ましてくださった。私のことをよく理解してくださっていた先輩である。尊敬するその先輩のあの一言で、管理職の道に気持ちを向けることになった。心を動かされた言葉である。

今、私も職員に管理職の道を勧める立場にある。その後ろ姿は決して尊敬されるものではないが、後継者が後に続いてくれるよう、心を動かす言葉を絞り出し、自分の信条、スタイルで、後輩たちに語り掛けていこうと思う。



校長先生、大すぎだよ

大丸小(隅)田 崎 武 彦

「いけんすつかね」「大丈夫やととけえ」

今から八年前、新任校長一年目、学校でほぼ毎日、心の中でつぶやいたり、自分自身に問い掛けたりしていたフレーズである。当時、翌年、就学予定の新生一年生に、筋萎縮性I型の難病を抱える子供(男子)がいた。その子供の入学、就学に備えた準備・検討委員会を、ほぼ毎月実施していた。医療的ケア児を受け入れ、指導するノウハウも全く持たない中での準備・検討委員会では、意見・考え方の相違により、保護者とぶつかる場面も幾度もあった。そんな厳しい状況が続く中、時間は経過し、入学、就学に至った。男児は人工呼吸器装着のため、発声することができない。そのため、男児とは視線や目の動きで、思いや望みを汲み取り、確認するといった手段で、コミュニケーションを図っていた。「目の動きで分かるわけない」。当時の私の本音、言い分である。ところが、男児との関わりを重ねていくうちに、何となくではあるが、目の動き、視線による訴えが、具体的に認識できるような感覚が芽生えてきた。「気持ちを通じる」といった感覚が、とてもうれしかった。男児への肯定的・共感的な思いが広がっていった。

異動を控えた年度末、文字の視線入力力の学習をしている場面を授業参観していると、

「校長先生、すぎだよ。」と、視線入力力で伝えてもらい、私はとてもうれしくて大喜びした。

ところが、「ちがうよ、ちがうよ。」と、視線入力でコール。

「えっ、違うの。ショック。」と、嘆くと、「校長先生、すぎだよ。」と、視線入力力で再びコールしてくれた。担任と大笑いしながら、とてもうれしくて涙がこぼれそうで、堪えながら、男児に「ありがとう」と伝えた。

男児の四年間の成長を目の当たりにし、障がいを抱えながらも、学びたい、自分らしく生きたいといった子供の可能性、未来を否定的に捉え、踏みにじろうとしていた自分。そんな自分に気付かせて、戒めてくれた男児に、心から感謝しなければならぬ。そして、男児からの「校長先生、大すぎだよ。」、校長である私を支える大切な大切な、心に残るひとことである。



「一期一会」に感謝して

頼娃中(南) 飯山 哲志

教師になり三十年余りが過ぎました。初任時代の奄美大島を含め、黒島、屋久島と離島に三回赴任した他、頼娃中学校を含め計八校目となりました。今思い出すと、その土地土地で出会いがあり、思い出深いものがあります。

表題に書きました「一期一会」とは、よく「人と人との出会いは一度限りの大切なもの」という意味で使われたり、「生涯に一回しかないと考えて専念する」という意味で使われたりしています。茶の道で知られる千利休(せんのりきゅう)の弟子、山上宗二(やまのうえそうじ)の本に「一期に一度の会」とあり、茶道でよく使われるようになりました。「これから幾たびも茶会を開く機会があつても、この茶会と全く同じ茶会を二度と開くことはできない。だから、茶会は常に人生で一度きりのものと心得て、相手に対して精一杯の誠意を尽くさなければならぬ。」と、言われます。

ところで、私が教師になり二校目の学校に赴任した時に、当時の校長先生が、私に話してくれた言葉があります。「飯山先生、これから多くの出会いがあると思うが、こうして先生と出会えたのは何かの縁、この出会いを大切にし

ましょう。そして先生の力が是非必要です。協力をしてほしい。」「一期一会の精神で今日の出会いを大切にしていきたいと思います。」と、励ましていただいたことを今でも覚えています。当時の校長先生とは、現在も交流があり、これまでも色々な場面で助言や励ましをいただいています。この先生との出会い以降、人との出会いを大切にしています。

時間は流れ、役職定年の年、頼娃中での出会いを大切にしながら、これからも前に進んでいくと思います。



最善の努力

喜界高 松野下 修司

私は小学生の頃から柔道を習い始め、これまで修行の過程で様々なことを学んできました。現在も町の公民館講座で柔道教室の講師を任され、幅広い年代の方々へ柔道を教えています。楽しく簡単に伝えようと創意工夫することに、新たな学びを感じています。

大学生の頃、ある試合で判定負けを喫しました。当時のルールは、現在のようなゴールデンスコアによる完全決着の概念はなく、規定の試

合時間が過ぎればそこで試合終了となり、それまでの試合内容で三人の審判が勝敗を判定するものでした。自分では勝っている評価でしたが、真逆のジャッジを下され、慥然とした態度で試合場を後にしました。それを見咎めたコーチから、「お前は自分の勝敗を他人に委ねる試合をしたんだ。そんな態度はするな。」と、指導されました。すぐに言葉の真意を理解することはできませんでしたが、後になって二つの意味に気付きました。一つは、言葉どおり他人に評価を委ねたのであれば、その結果に不満があっても受け入れなければならないこと。もう一つは、投げることで明確に勝てるのに、その努力を怠る消極性への指摘です。勝つために本気で試合に臨んだのかを、問われていたのです。

教師の業務に勝敗がつくことはありませんが、これまでの仕事で個々の判断の場面で、「最善の努力をしているのか」と、自問することが教訓として生かされています。また、評価は多くの場合、自分以外に委ねられます。評価が出るまでに自分が最善の努力をしてきたのであれば、どのような評価であれ、それを受け入れて次の対応に進もうと考えられるようになります。学生の頃の小さな気付きでしたが、私はこれからも「最善の努力」を自問し続けるでしょう。

ある日の校長講話



今、私たちにできることを

城川内小(北) 廣 留 美

このキーホルダーは先生が趣味で作っているものです。何でできているか分かりますか？

以前、青い海と珊瑚礁が広がる美しい島の学校にいました。近くの港にも熱帯魚が泳いでいるような、自然豊かな場所です。

学校では毎月全校児童で、海岸と地域の清掃活動をしていました。海岸清掃をしている時、一人の児童が叫びました。「アイスクリームの袋がある！」。それは島にはないコンビニエンスストアのものでした。海を漂うゴミのほとんどは、海に捨てられたものではありません。だれかが捨てたものが、海にたどり着いているのです。

いつも清掃している海岸には、台風が近づくと、ウミガメが避難して来ると、児童から教えてもらい、海岸に見に行ったことがあります。港内には十頭以上のウミガメが、波間に見え隠れしていました。打ち寄せる波で、港の奥の方に流されていくウミガメもいました。港の一番奥に行くと、打ち寄せられたゴミの中を泳ぐウミガメを見つけました。呼吸のために顔を出す度に、間違ってゴミを飲み込んでしまうのではないかと、心配になりました。しかし、台風前の荒れる海ではどうすることもできずに、その場を離れるしかありませんでした。

そんな体験から、休日に島内の海岸に打ち寄せられているゴミを拾い始めました。多いときには、二人でレジ袋二つ分も集めることもありました。そのうちに、ビーチクリーン活動をしている方々と知り合い、小学生でもできる活動として、キーホルダー作りを始めました。海をきれいにしたいという気持ちで始めたゴミ拾い。その拾った海洋プラスチックが、世界で一つだけのキーホルダーになりました。

みんなもまずはゴミを捨てないことから始めてみましょう。それが環境を守る第一歩です。大切な海を守るのは、みんなのほんの小さな心掛けです。

大切にしてほしいことと私の目標

「二学期始業式の話から」

菱刈小(始伊) 米 森 一 孝

〈前略〉

皆さんに大切にしてほしいことの二つ目は、「挑戦する」ということです。新しいことや難しいことに挑戦するのは、少し勇気も必要ですね。ひよつとしたら上手いかなということもあるかもしれませんが。でも、「挑戦する」ことは、必ず皆さんの新しい力になっていきます。まずは、一歩踏み出して、やってみましょう！

ここでの校長先生の目標は、一つ目、「一学期以上にみなさんの頑張っている姿を教室に見に行く。」ことです。一学期に「よく来るけど校長先生は暇なんですか。」と、聞かれたことがありました。みなさんの頑張っている姿を見るのも、校長先生のお仕事のひとつだと思ってくださいね。二つ目、校長先生も皆さんと同じように本を読んで勉強をします。十冊以上が目標です。

皆さんに大切にしてほしいことの二つ目は、

「友達を大切にする」ことです。一学期のアンケートに「あなたは正しい言葉づかい(くん・さん、ふわふわ言葉、時と場)がきちんとできていますか。」という質問がありました。十五個ある質問の中で「できていなかった」と、答えた人が一番多かったようです。教科の学習もそうですが、学校の多くの活動には、一人ではできないことがたくさんあります。相手の気持ちになって言葉を掛けることで、友達との絆が更に強くなり、友達を大切にすることに繋がっていきます。そして、そのことが一つ一つの活動で大きな力を発揮していくものと、校長先生は信じています。

ここでの校長先生の目標も二つです。一つ目、「みなさんや先生方とたくさんお話をして、みんなの気持ちをもっと知る。」ことです。二つ目、「毎日のあいさつを、心をこめて行う。」ことです。

みなさんと校長先生の目標は違っていても、頑張る気持ちは同じです。お互いに素敵な二学期になるように頑張りましょう。

自ら進んで

「気づき・考え・実行する子へ」・・・

笠野原小(隅) 才 川 文 秋

先日、校長先生はこんな場面を見かけました。

それが、この写真です。

休み時間に三年生のお友達が三人で、トイレの手洗い

場の床を一生懸命に磨いているんです。

「どうしたの?何かこぼしたの?」と、尋ねると、そのお友達は、「なんか、床が汚れていて

気持ちが悪かったから、みんなで床を磨いています。」と、答えました。掃除当番や係活動で

はなく、誰かにお願いされたからでもなく、自分で気づき、考え、実行した三人の姿に、校長

先生は感動しました。そして、ある人のことを



思い出しました。みんなも分かりますか？そう、アンリーデユナンです。

アンリーデユナンは、激しい戦争の中、傷ついた兵士たちが何もされていないのを見て、町の人々などと協力して、傷の手当てなどを行いました。そこから、今のJRC青少年赤十字が生まれています。私たちの学校も加盟していますね。

この三人のお友達は、床の汚れに気づき、どうしたらよいかを考え、「三人で磨こう」と、自分たちで実行したところが、本当に素晴らしいですね。このお友達は、掃除が終わると、「よっしゃ。これでみんなが気持ちよくトイレを使えるね。」と、話しながら、教室に帰って行きました。

何かに気づき、自分で考えて、実際に実行することは、このように誰かのために役立つことがあるということを皆さんにも知ってほしいです。例えば、友達が困っていたら優しく声を掛ける。廊下や教室にゴミが落ちていたら、ひろう。誰かが寂しそうだったら、一緒に遊ぶ。などまだまだたくさんありますね。これを「奉仕の心」や「ボランティア精神」と言います。



皆さんが、自分にできることがあることに気づき、どのようにしたら解決できるかを考え、実行することは、授業の中でも休み時間でも、おうちでもできます。これからも、自分から進んで「気づき、考え、実行する」笠小っ子が増えていくと、素敵な学校になると思います。

話のひろば



虹の学校

柳迫小(隅)

佐藤 義明

それはまだ三月のこと。赴任が決まり、初めて本校を訪ねた日は、雨が降っていた。ひとしきり、で

も、まだこの時期なので、秘かに概観を終える頃には、雨も落ち着き、雲の切れ間から光が差してきた。ふと空を見上げると、校舎にかかる虹に気付いた。その時は、ただ何となく幸先のよさを感じる程度だった。

柳迫小は、東西を走る国道十号線と南北を走る県道五百号線が直行する交通の要地にある。国道を東に三分も走れば隣県の都城市だ。そのため、一日中交通量が多く、子供たちの安全確保が最大の課題でもある。このような現状から、

地域の長年の悲願でもあった国道の拡幅工事が現在行われている。本校の敷地にも一部かかることから、遊具の移設や植栽の伐採等が行われた。

令和六年八月二十六日、そろそろかと覚悟を決め、シンボルツリー（二本の銀杏の木）の根元を清め、手を合わせた。翌日も変わらない夏休みの一日だった。いつもどおり出勤し、玄関に視線を向けようとしたが、その日もふと空を見上げた。なぜそうしたかは分からない。「あつ、虹だ。」思わず口をついた。二本の銀杏の木を包み込むように輝く弧が広がっていた。それから二時間後、開校から百有余年、児童の様子を見守ってきた夫婦銀杏が伐採された。「今までありがとう。これからも頑張れ。」エールを送ってくれたような気がした。

その年の送別会、転任する職員が、本校での思い出を語った。その中に図らずも、「柳迫小は虹の学校です。」と、形容する職員がいた。そうか、私と同様に、この不思議な力・奇跡を感じながら過ごしていた職員がいたのだ。年度が改まり、このことを歓迎会で転入職員にもつないだ。

本校では、子供たちが未来に備える力を「他者理解」（異文化・多様性を受容・尊重する気持ち）と「創造する力」（他者と協働し納得解を見出す力）と捉え、学校経営の基盤に「つながる」を据え、「あいさつ・ボランティア・学び合い」に、取り組んでいる。目に見える虹は、いつ架かるかは分からないが、子供たちには、ここぞという時に、見えない虹を心に架けられる存在であってほしいと、願っている。



メイちゃんのお話

伊集院北中（日）

内 健 史

十一月十四日は愛猫のメイちゃんが天国に旅立った日だ。十四年前に保護し、八年前から一緒に暮

らしたメイちゃん。猫と暮らしたことがない自分分は、ニャアニャア鳴かれても何を伝えようとしているのか分からず、いつも「教えて、メイちゃん先生」と、苦笑いしていた。それでも、ふれ合い、つながりを感じながら一緒に過ごした日々は、温もりと幸せに満ちていた。

一昨年の夏の終わり頃、お腹のしこりが気になり病院に連れていくと、メイちゃんはガンにかかっていた。手術をしたときにはもう手遅れだった。人間の言葉で「痛いよ」、「病院に連れていって」と、教えてもらえていたら、早く気付けていれば……、命を救えていたかもしれない。

メイちゃんの命の灯火は、日に日に弱く、小さくなっていった。寝ている間に、仕事にしている間に、命が途絶えるのではないかと心配し、奇跡が起きて元気になってくれないうと祈る日々が続いた。思うように動けなくなった体で妻の膝の上に乗ってきてくれた翌日の未明、私と妻に見守られながらメイちゃんは最後の息を引き取った。十二年の命だった。最期の一瞬まで精一杯生きようとしたメイちゃん。家族がそろってお別れできる時まで頑張ってくれたのだろうか……。最後まで優しく、お利口さんのメイちゃんだった。

朝露がキラキラ輝く中、温もりの残る体を抱いていつも眺めていた庭を散歩したこと、眠るように横たわる棺に花々を飾ったこと、満天の星空にメイちゃんが白い煙になって吸い込まれ

ていくのをずっと見つめ続けたこと……、天国への旅立ちを見送った日のことは決して忘れない。

メイちゃんを亡くした悲しみは未だ消えることはないが、メイちゃんの導きだろうか。縁あって保護猫の兄弟モコとモカを家族に迎えることになった。いっしょに過ごせる時間と命には限りがあることを忘れずに、言葉が通じない分、小さな命を大切に見守っていきたい。メイちゃんの分まで……。忘れてしまいがちな、言葉で伝え合えることの尊さ、日々を一緒に過ごせることや命のかけがえのなさを教えてくれたメイちゃん先生、本当にありがとう。



戦後八十年の

長崎平和学習

入来中(北)

石畑 浩一

原爆投下から八十年という節目の今年に、久しぶりに修学旅行引率で長崎を訪れた。

平和学習の中心で

ある長崎原爆資料館も約十年ぶりの訪問となっ

た。明らかに変わっていたことは、実物大のファットマンの模型に色と模様が施されていた。アメリカから新たに提供された映像が流れていて、この模様が付いていた方がより真実に近いと、更新されたとのことだった。このファットマンとは違う意味合いで、八十年という年月を経て、今後変わっていかざるを得ないことに、私自身気付かされた。それは、戦争体験そのものやそれを語り継いで行くことの風化対策である。ずっと言われてはきたことだが、いよいよというか、ますます実感を大きくしてきた。今夏のニュースでも盛んに使われた事実として「全国の被爆者が十万人を下回り、平均年齢も八十六歳を越えた」ということ。実際、先述の修学旅行の中で企画された被爆者講話の講師の方は、八十一歳であり、最も伝えたかったことは、「記憶は無くても記録はある、知ることによって乗り越えられる。」というものだった。日本国民の多くを占める、戦争を知らない世代としては、原爆とは？戦争とは？何だったのかということについて、積極的に知ることに努め、これまで以上に平和学習に熱量を注いでいかなければならない、そう感じさせられた。よく海外の

人々、特に核兵器を有する国の人々に「被爆の実相」を知ってもらうことから始めなければならないという主張がなされる。全くそのとおりであるが、同様に国内においても、まずはこの「被爆の実相」をしっかりと語り継いでいかなければならないと思う。この原子爆弾が直接的に人や環境にもたらしたものの、特に人への被害は甚大であるとともに、あまりに無惨であり非人道的であり、目を背けたくなるものであるが、ここを抜きにしての平和学習は進められない。資料館の話に戻ると、近々の一部リニユーアルに向けての計画が進行中とのことだ。是非、「黒焦げとなった少年」などの写真資料を用いての、原爆投下直後の男女の区別もつかぬ遺体であふれかえっていた広島・長崎の街の様子とか、誰なのか分からないくらい皮膚のただれた人々から水を求められても、どうにもできなかった話などをしっかりと引き継いでいってほしいと思う。



読書案内



■ 畑中翔太 著

チームが自ずと動き出す

内村光良リーダー論

郡山小(市)山 本省 吾

年度末に、某保険会社の調査による「新社会人が選ぶ理想の上司ランキング」の発表がある。スポーツ選手やアナウンサーなど、各分野で活躍中の方が名を連ねる中、毎年一位に輝いている人がある。タレントの内村光良さんである。我々世代には馴染み深いお笑い芸人で、私も国営放送のコント番組を、欠かさず視聴する時期もあった。新社会人が選んだ理由は、番組での司会者としての姿や、「怒ったところを見たこ

とがない」などのエピソードから、親しみやすい、優しいなどが挙げられるという。

校長という職も、学校という組織の中で、教職員の上司であり、リーダーといふべき存在である。リーダーには、組織の目指す方向性を明らかにし、その目的達成に向けて人々を導き、支え、成長させることが求められる。

本書は、芸能界という組織の中で、理想の上司として認められている内村さんのリーダー論の分析ではなく、共演者やスタッフ総勢二十四人の証言をもとに、リーダーとは何かに迫る内容である。「リーダーシップ」、「チームマネジメント」、「コーチング／育成」、「自己マインド／パーソナリティ」の四つの章で構成され、内村さんの姿勢や振る舞いを、一般的な組織におけるリーダー論に置き換え、本の題名にもある「チームが自ずと動き出す」ための秘密が書かれている。

働き方改革や若手職員の離職、休職者増による教員不足など、学校現場が抱える課題は複雑化・多様化している。これまで培われてきた管理・指導型のアプローチだけでは解決にまで至らないこともある。この書には従来のリーダーとしての型だけではなく、部下の言葉に耳を傾け、心理的な安全を大事にする支援型のリーダ

ー、チームワークを重視し、共に考え、共に働く協働型のリーダーの重要性について書かれている。

時代に即したリーダーの在り方やマネジメント力向上について、ヒントとなる一冊である。

朝日新聞出版 八百五十円

■ 坂本 勤 著

サカナはみんな左向き？

神山小(熊)岩 崎 宏 志

学校をサボってきたメダカが、水草の陰で寝ているカワウソに出会う。「オレは眠ってる。だから世界中が見える。この川の外にはおまえの知らない面白い動物がたくさんいる」(ボクの知らない不思議なこと、教えてくれるかもしれない)「聞かせてやろう。宵の明星が出るまでな」と、二人の時間が始まる。それからカワウソは、三十の動物の話をゆつくりとメダカに語り始めた。「キリンとカメ」「左向きのサカナ」「メダカの学校」「明るいコウモリ」「勉強しな

サイ」「ワシは思う」「支えるゾウ」……。ユーモラスな絵と短い文章で構成されたそれぞれの話は、「人はそれぞれ違うよさがある」「物事を見つめる視点の差異と相互理解について」「愛情をもって相手の心に寄り添うことの大切さ」「子どもの自立を如何に促すか」「あらゆる人格や命の尊重」など、人としての在り方や世の中を捉える視点、そして、子どもを育てる教師としての必要な価値観を示唆してくれる。

著者は、北海道出身で、中学校の国語教師として教育に携わった方で、退職後、詩画作家としての活動や「子どもの心を守る」というテーマでの講演もされている。「タマゴマンは中学生」は代表的な著書であり、私自身、以前勤務した学校で家庭教育学級の講話を行った際に、保護者に紹介させていただいた。

今年度から本校で勤務しているが、児童は日々、アサガオやヒマワリと同じように、純粹に成長する姿を見せてくれる。一人一人の個性による感じ方や考え方、表現の仕方はそれぞれであり、我々教師は、常に個に応じた最適なアプローチを模索しながら児童を見つめている。そして、全ての児童が、人として尊重されて、安心して学び、仲間と共に笑顔で生き生きと成長できるように、これからも全職員で取り組んで

いきたい。そんな教師としての志を後押ししてくれる一冊である。

宵の明星が光ってる。メダカは星に向かって大きく宙返りをした。

北海道新聞社 千四百十円

■ 十人のおとな 選

小川美奈子 発行

おとなになるのび太たちへ

坂元中(市) 濱田 津世志

「子どものころ、僕はのび太でした」

「ドラえもん」の作者、藤子・F・不二雄先生が不器用だった子ども時代を振り返って語った言葉である。運動も勉強もできず、失敗ばかりで、すぐ怠けて、困ったときにはドラえもんに甘えるのび太。のび太ほどではなかったが、自分にもそんなところがあるよなあと感じるところも大きい。

本書では、子どもたちに対して、各界の著名人が「ドラえもん」の作品を通して伝えたいこ

とが掲載されている。子どもの頃はのび太の視点でしか読んでいなかった内容も、大人になったら親のような心情で読んでしまう自身の変化に驚いたことを語る声優。大人になっても、子どものように好奇心旺盛で、いつでも新鮮な気持ち忘れず、子どもでいること、自分が何よりも楽しむことの大切さを語るYouTuber。当たり前は常に当たり前ではない、自分の「当たり前」が相手の当たり前ではないと思って接すること、対等な関係でお互いを尊重しあえるいい仲間になり、いいコミュニティが生まれると説く宇宙飛行士。いずれも、よりよく生きていこうと考えている子どもたちに響く助言である。

「ドラえもん」が長きにわたって愛されているのは、作者の藤子先生がみんなの心の中にいる「のび太」だったからこそかもしれない。最後の一話は、二十五年後の父親になった自分がかかりし、大人になるのが嫌になるのび太が発奮し、立派な大人を目指すために再度決心を固める場面で終わる。長続きはしないが、失敗を経験するたびに反省し、自身を向上させようとする「のび太」に、自分もなろうと思わせられる一冊である。

小学館 千四百円

歴史と品格ある「鹿児島教育」の紙面の中で、私のような者の「趣味・文芸」を紹介することに、幸せと不安を感じながら、述べさせていただく。私には凝った趣味というものはなく、ソフトバンクホークスや鹿児島ユナイテッドの応援、スコアではなく楽しい時間を過ごすためのゴルフ、車で行ける九州内の観光地巡りぐらいであり、実に「浅く広く、特にこだわりもなく。」である。

そんな私の趣味の中で、あまりお金がかからないので、飽きることなく、よく続けられているのが、「古江港（鹿屋港）一択」の魚釣りである。

古江港の堤防からは、様々な種類の魚が釣れる。アジ、メジナ、ボラ、アラカブ、ベラ、オオモンハタ、キス、メッキ、チヌ、ハマチ、イカ、エイ、フグ等々、バラエティに富んでいる。

当然、釣り方も魚によって変わる。サビキ釣り、ゴカイをロケット錘で飛ばす投げ釣り、メジナやチヌが釣れる浮き釣り、オオモンハタがとびついてくるルアー釣り、リールを使わず柔らかい竿で引きを楽しむ延べ竿釣り、アジを狙うアジング、餌と錘のみのブッコミ釣り、イカ狙いのエギング等々である。干潮・満潮、大潮・小潮、朝まずめ・夕まずめ等々、いわゆる釣りの条件といったものも一応は気にしながらやっているが、大体がその時の気分次第で、いろいろな釣りをのんびり楽しんでいる。

私には、魚釣りにおける師匠がいる。以前は、

趣味・文芸

大切にしたい師匠からの教え

原良小(市)新屋公彦

全く寄ってこない。古江港の猫やトンビは、師匠のことを「釣りが上手でよく魚をくれる人。」と、完全に理解している。

二つめは、道具を大切にすることである。師匠の車は、釣り道具で埋め尽くされており、さながら「動く釣り具屋」である。きれいに整理されていて、どこに何があるかも完全に頭に入っている。また、使った道具は点検をした後、きれいに洗ってしまっているため、車の中は一切魚やえさのおいがしない。以前、私の車のトランクの中においてあった私の釣り竿が、ゴルフバックの下敷きになっていた様子を見た師匠から、「竿がおれるだろうが。」と、お

叱りを受けたことがある。とにかく道具を大切にしている。

三つめは、停めた車から五メートル以内で釣れるところでしか釣らないということである。私の「古江港一択」の釣りは、実は師匠のこのポリシーからきている。船釣りや磯釣りなど、もう少し大きな魚を釣る醍醐味を味わえる釣り方や場所はたくさんあるが、決してそのような釣りには手を出さない。「めんどくさいから。」「つかれるから。」と、言っているが、私は師匠が古江港の海と魚（猫もトンビも）が大好きなんだらうと、勝手に想像している。

四つめは、釣りの仕掛けは自作するということがある。市販のものに頼らず、魚の種類やサイズ、水深、波や風の状況に応じて、浮きや錘、針のサイズ等を工夫して、大物を仕留めた時は、得意げな満面の笑みがあふれる。その後、「いいか。新ちゃん。魚釣りは実験なんだよ。見えない海の底を想像しながら、魚の気持ちになって、いろいろなことを試しながら魚釣りを楽しみなさい。」というお言葉をいただく。子どもたちへの接し方、学校経営においても通ずるところがあるなあと、いつも、なかなか沈まない浮きを眺めながら、自分なりに受け止めている。

これからも師匠からの教えを大切に、魚釣りを楽しんでいきたい。

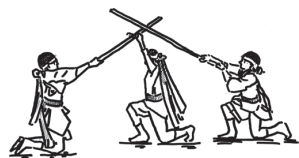
郷土の紹介

神秘的な静寂に

包まれた世界遺産の地

朝日中(大)

埴 中 勝 実



奄美市の市街地に隣接する奄美市立朝日中学校は、浦上、有屋、大熊、仲勝、鳩浜、朝日、和光の七地区からなり、今年で創立七十八周年を迎えました。生徒数は三百十一人、一年生から三年生まで各三学級、特別支援学級三学級となっています。

この地域は、かつて水田が広がる農村地帯でしたが、都市計画事業によって、現在では市街地に通じるバイパス道路や、奄美空港へとつながる国道五十八号線が整備され、交通の便が非常によくなりました。この交通の利便性は、生活の豊かさや人口増加をもたらし、近年では住宅の建設ラッシュが進んだことで、生徒数は島内で最も多い学校となりました。さらに、公立機関、郵便局、銀行、病院、そして大型店舗なども次々に進出し、利便性の高い都市機能と自然との共生が、見事に融合した地域と言えます。

朝日中学校の周辺環境は、自然にも非常に恵まれています。四季折々に移り変わる山々の姿は生徒たちの心を癒し、朝の静けさの中で野鳥

のさえずりが響き渡ります。深い原生林の中、ひととき目を引く赤褐色の姿をしたアカショウビンは、夏の奄美に渡ってくる渡り鳥で、雨を呼ぶとされる「雨乞い鳥」としても知られています。その鳴き声は、まるで自然が奏でる祈りの音です。また、青と赤のコントラストが美しいルリカケスは、島の固有種です。森を縫うように飛ぶその姿は、奄美の風景の中にすっかり溶け込んだ南国の瑠璃の使者です。

奄美の中でも風光明媚な景勝地として知られている、大熊地区に面した海岸線は、夕暮れ時になると海の色が刻々と変化し、特に「大熊展望台」からの眺めは格別で、名瀬の街並み、湾内から外海までを一望できるロケーションが魅力です。夕陽が空と海をゆっくりと染め上げていく様子は、まるで自然が描く絵画のように鮮やかで、日によって空の色が異なり、黄金色、薄紅色、澄み渡る青色などが混ざり合う幻想的なグラデーションに包まれます。こうした自然景観の中で育つ生徒たちは、日常的な美しさと静けさに包まれながら成長していきます。

歴史文化の面でも本地域は深い魅力を用意しており、浦上地区に佇む「有盛神社」は、平安末期の武将・平有盛を祀る由緒ある神社です。源平合戦に敗れた平家の一族が、奄美に渡ったという伝承に基づき、地元では「平家落人伝説」の象徴として語り継がれてきました。境内には、石造弁財天像や一八一六年建立の平有盛墓碑など、貴重な文化財が残されています。静かな丘陵に囲まれた神秘的な空間で、歴史と自然の調

和を体感することができます。

さらに、ノロの居住跡をはじめとした伝統的な宗教遺構が点在し、奄美の信仰文化や歴史を今に伝えています。ノロの居住跡(トネヤ跡)とは、かつて奄美大島を含む琉球王朝時代に存在した女性神官「ノロ(祝女)」が住み、祭祀を行っていた場所のことです。ノロは各集落に配置され、地域の安全や五穀豊穡、病氣平癒などを祈願する宗教的役割を担っており、大熊地区に残されていた「トネヤ跡」は、神秘的な静寂に包まれた空間でした。地域の人々の心に寄り添っていた神聖な祈りの地は、奄美の精神文化を体感できる貴重な歴史遺産です。

最後に紹介するのは、奄美の自然美を独自の感性で描いた日本画家「田中一村終焉の地」です。有屋地区にあるこの場所は、奄美の自然と芸術が交差する特別な空間です。静寂な空気が彼の孤高の芸術家としての人生と、数々の作品に込められた情熱と感性が、時を経て伝わってくるような気がします。

奄美市立朝日中学校では、このような自然、歴史、文化の豊かさを生かした教育活動を展開し、地元の方々との交流を通して、郷土への誇りと愛着を深める取組を行っています。生徒一人一人が地域に根差しながら、生涯にわたる学びと人間形成の基盤を築き、この奄美という「神秘的な静寂に包まれた世界遺産の地」で、地域の未来を担う存在として育んでいくことでしよう。

